



<大阪歴史博物館>

## 目 次

### ■論考・提言・実践報告

心象芸術論からみたミュージアム・マネージメントの視点

～認知と情報論をキャンバスにして～ 第3回

/ ミュージアム工学研究所 棚井 喜孝.....2

### ■時の話題

ミュージアムリレー50回を迎えるシンボル旗を披露

/ 沖津 穎男.....5

第3回世界科学館会議について

/ 国立科学博物館 守井 典子.....6

### ■研究部会活動報告

制度問題研究部会 平成13年度第1回研究会

/ 制度問題部会幹事 井上 敏.....8

### ■支部会だより

関東支部会 日本科学未来館実地見学研究会

/ 関東支部会幹事 原 秀太郎.....11

### ■新刊紹介

聞き書きオーラルヒストリー 堺打ち刃物を語る

/ JMM A事務局 高橋 信裕.....17

### ■インフォメーション

.....18

論考・提言・実践報告

## 心象藝術論からみた

## ミュージアム・マネジメントの視点 ～認知と情報論をキャンバスにして～

ミュージアム工学研究所  
榎井 喜孝

第3回：ミュージアムという認知の場

はじめに—ミュージアムというメディア

これまで、本連載の第1回では、「心象芸術論」を手がかりにして、創作物を媒体として創作者の意図が伝達されるというのではなく、それを観賞しようとする側によってイメージされ、価値付けられるという事を見てきた。

また、第2回に於いては、「知の様式」や「情報の姿」を検証しつつ、ミュージアムの利用者サイドからの学びの方向性を確認してきた。

ともに、創る側からの視点ではなく、見る側、利用者側から、その意味・内容を伝えようとする媒体への「読み取り」によって、価値付けられている事を示している。

これまで、媒体（メディア）といえば、伝えようとする情報（意味や内容）を載せて運ぶ伝送路的なものとして捉えられてきた。

新聞、雑誌、TVなどはその例で、それらによって創造・編集されてきた情報を、私達に伝える媒体であると考えられてきた。

そう言った意味に於いてはミュージアムという環境も同じであり、「情報発信の場」という場合のミュージアムの姿は、まさしく、媒体という表現が相応しいといえる。

しかし、前回までの論考は、必ずしも伝えようとする側の情報がそのまま伝わるというのではなく、利用者側の能力や興味の対象等によって、伝えようとする側の意思とは違った価値付けがされているという事を示している。

そこで本稿では、メディアとしてのミュージアムの特性を、もう一方の所属学会である認知科学の研究成果を概観しつつ、実際の活動に即して検証し、ミュージアムという環境の持つ「場の特性」を明らかにしつつ、新たなミュージアム・パラダイムと、そのマネジメントの方向性を見てゆく事とする。

情報システムとしての視点から

前にも述べたように、ミュージアムというのは、情報を利用者に伝えるという意味に於いては、一種の情報システムである。

それも、情報処理的な見方からは、単に一方的に情報を伝えるという通信システム（図3-1参照）というのではなく、展示や教育普及活動という何らかの環境や状況の中で、利用者が自らの学びを体験するメディアである。

図 3-1 通信システムの概念



この場合、考えなければならないのは、ミュージアムという環境は、情報を創り、伝達しようとする側と、それを理解し、受容しようとする利用者との間を媒介する「インターフェイスとしての機能を持っている情報システム」であるという事である。

つまり、ミュージアムとは、図3-1に見る情報処理的な通信システムとしての伝送路ではなく、利用者側からの問い合わせや、それに関する疑問を生じさせる様々な機能を持っている環境であり、認知的なインターフェイスでもある。

それでは、ミュージアムという環境がインテリジェンスであるとすれば、どのような性格・特質を持つているのであろうか。

この事を検証していく事が、今後のミュージアム・マネジメントのあり方を探り、現今の社会状況に相応しいミュージアムの姿を見い出す事に繋がるのではないかと考えられる。

## インターフェイスの機能

インターフェイスという語は、最初に化学の分野で、境界面を表す学術用語として用いられたが、コンピュータの分野で2つの機械をつなぐための翻訳機械として導入されるとその内容が拡大され、「人間と機械」の接面から、「人間と環境」、「心と物」、「科学技術と人間性」など、あらゆる人間的な対立と接触の局面に適応されるコンセプトとして認識されるようになってきた。(＊3-1)

本稿では、この解釈をミュージアムという環境や活動に当てはめて考えてゆこうという立場である。

つまり、ある1つの状況を、一方が他方の情報を獲得し、そして、その獲得された情報に従って自らを変

換してゆこうという一般的な構図(\*3-1)をミュージアムという環境に当てはめようとする立場をとる。

であるならば、図3-1で示したような、単に一方的な情報を伝える伝送路などではなく、何らかの認知的な活動を触発しているメディアであると考えるべきであろう。

従って、本稿で述べている様に、単にミュージアム側の機能（活動）だけを検証してゆくのは不十分であり、インターフェイスのもう一方の接面である利用者側の認知的な動きについても検討してゆく必要がある。

今日、ミュージアム・マネジメントの研究における心理学的な検証の必要性は、こういった面からも感じられる。

そこで、次項ではひとの学習形態についての近年の研究成果について触れておくことにしよう。

### 学習モデルを巡って

近年の学習心理学の研究成果を見る時、人の学習形態について誤解を恐れずに表現するとすれば、大きく分けて、「内化型モデルの学習」と「参加型モデルの学習」とに分けられている。

「内化型モデルの学習」とは、“個人の頭の中に知識（情報）を埋め込ませていく、外部の知識を個人の頭の中に内化させていく”事を言い、「参加型モデルの学習」とは、“共同体の実践に参加する中で他者の協力を得ながら、他者と共に知識を自分のものにしてゆく”という考え方である。（\*3-2）

この場合、ミュージアム・マネジメントという視点からは、どちらの学習モデルがどうのというのではなく、私達の対象としているミュージアムという環境に於いては、どちらのモデルがより適応するのか、と捉える方がより適切であろう。

私自身のこれまでの認知科学についての学びの成果からいえば、様々な今日の現状を考えた場合、ミュージアムという環境や活動については、「参加型学習モデル」が相応しいと考えている。

前回、情報化社会にあって、今日のミュージアムを「情報発信の場」としてのミュージアムの考え方には馴染まないと述べたが、その背景には、情報論的な検証だけではなく、「情報発信の場に対する内化型学習モデル」より、今日のミュージアムのあり方を考えた場合の「参加型学習モデル」を優位とする学習形態の検討からも同様な結論となる。

### 「参加型学習モデル」としての ミュージアムでの学び

御存じのように、ミュージアムというのは単なる

ハードで構成された器ではなく、学芸員による様々な活動が内在している「活動体」そのものである。

展示という「学習環境」についても、それは、学芸員の展示活動であり、学びに至らせるソフトを含んだ「情報システム」である。

また、今日、ミュージアムで行われるようになってきた様々な「ワークショップ」や館内での「ガイド」や「ギャラリートーク」、ボランティア等による展示解説や本来的な「ハンズオン」の考え方、あるいはリレーションシップを推し進めるミュージアム活動のあり方等、いわゆるインターラクティブな活動が行われるようになってきたミュージアム・マネジメントの現場を考える時、私は、ミュージアムという環境に於ける学習形態としては「参加型学習モデル」を考える方がふさわしいのではないかと考えている。

展示や教育普及等の活動そのものが、利用者にとっては一種の学習環境であり、その中に入つて（参加して）自らの主体的な学びが引き起こされる場であり、その事を保証しているのは、「ひと」という存在に対する表3-1に示した認知的な研究成果から得られた知見である。

表3-1 「ひと」という種の特徴

- \* ほぼ生涯にわたって優れた学習能力をもちつづける。
- \* 文化という形で集積された他の個体の経験を攝取できる。
- \* 能動的に環境と交渉し、そこから自分なりに知識を構成していく存在である。
- \* 環境に対する適切な働きかけを自らの工夫ができるとか、さらにそれを超えて自分なりに納得のいく説明を求める。
- \* 知的好奇心から、必要に始まって必要を超えて深く学ぶ事ができる。
- \* 自分自身を取り巻く世界について整合的に理解したいという基本的な欲求を持つ存在である。
- \* 環境の中に規則性を見い出そうとする傾向があるが、さらにそれにとどまらず、「なぜ」「どのようにして」そうした規則性が生ずるのかを知ろうとする傾向がある。

など

これまでの人間観が「人は何らかの必要に迫られない限り行動しないし、教える存在である」としているのに対し、ミュージアムという環境は、本来、このような人間観には馴染まない環境であり、むしろ、表3-1に示された人間観に立つ環境からであるとする方が相応しいといわざるを得ない。

私達ひとりひとりの能力を見た場合でも、ミュージアムという環境が、個人の学習という視点からも

「参加型学習モデル」の適応環境とする方が相応しいと考えられる。

そこで、次に、「参加型学習モデル」としての場を形成しているミュージアムについて、今度は、情報論的な視点から、ミュージアム・パラダイムの転換と今後のミュージアム・マネージメントの方向性を見る事にしよう。

### 情報通信システムからインターフェイスとしてのミュージアムへ

ミュージアムは、情報を扱う存在であるというのは、これまでの論考を引き合いに出すまでもなく、博物館情報論の視点からでも妥当な解釈である。

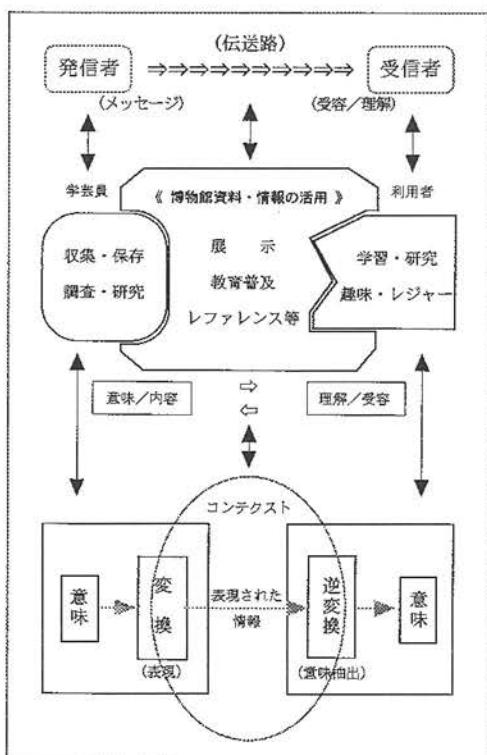
そこでは、収集、調査研究という活動を通して新しい情報が生まれ、展示や教育普及という活動によって生まれた情報が利用者に伝達される。

それはまた、ミュージアムとは情報の伝達手段であり、情報を伝えるメディアであるともいえる。

そこでは、意味が生成・変換され、利用者によって逆変換の過程を経て意味が伝わる。

それらの事をまとめたのが次の図3-2である。伝送路としての展示や教育普及、あるいはレファレンスという活動は、「参加型学習モデル」という環境特性を持ったメディアであり、意味を変換、あるいは、逆変換させるというインターフェイスでもある。また、各々のミュージアムごとのコンテキストの中で行われている情報処理システムでもある。

図3-2 インターフェイスとしてのミュージアムへ



利用者は、単に情報を受け取るというばかりではなく、積極的に環境に働きかけ、自らの知的好奇心を満足させようとする。それゆえに、その期待に反した結果であった時は、より以上の失望感が生まれ、その施設の評価を下げる。そこに、日常のメンテナンスやミュージアム・マネージメントにおける留意点があり、展示やコンピュータ、あるいは、各種の教育普及活動をはじめとしたトータルな学習環境構築への取り組みの重要性がある。

前にも述べたように、ミュージアムという環境は、単に、情報を生成・伝達する「情報通信システム」などではなく、生身の人間、それも表3-1で示した積極的で有能な「ひと」という種を扱う環境である。

今後は、これまでの情報通信的な環境としてのミュージアムとしてではなく、認知的な様々な活動をする場として捉え、ミュージアムの様々な活動についての総合的な見地からのミュージアム・マネージメントの視点が必要ではないだろうか。

次回は、本連載の最終回にあたるので、これまでの論考を踏まえて、これからの中のミュージアム・パラダイムとマネージメントのあり方をまとめてみたい。

図3-1 : 「博物館情報論」 樹村房発行を参考にして作成

\* 3-1 : 「文化のインターフェイス」 日本記号学会  
／東海大学出版会・1988年

\* 3-2 : 「文化と進化の心理学」 高取憲一郎著  
／三学出版・2000年

表3-1 : 「人はいかに学ぶか」 一日的認知の世界  
／稻垣佳世子・波多野謙世夫著

／中公新書・1989年、より一部抜粋

図3-1 : 「博物館情報論」 樹村房発行 および、  
「ネットワーキングへの招待」  
／金子郁容著 中公新書・1986年  
をそれぞれ一部参照して作成

時 の 話 題

ミュージアムを核とした町づくりの話題や、ミュージアム関連新制度など、ミュージアム・マネージメントに示唆を与えてくれるような新鮮な話題を紹介します。

## ミュージアムリレー50回を迎えるシンボル旗を披露

沖津 祢男

神奈川県西部地域ミュージアムズ連絡会(事務局、同県立生命の星・地球博物館、48施設加盟)がリレー形式で毎月1回加盟施設を巡回して開催してきた「ミュージアムリレー」が01年11月9日に第50回(走)の節目を迎え、会場となった地球博で会のシンボルの旗が披露されました。

この旗はリレーの50回達成記念事業として、同連絡会(WESKAMS)、日本ミュージアム・マネージメント学会(JMMA)、生命の星・地球博物館が主催して、同年11月22、23日に、神奈川県の小田原、箱根地区で開いた「ミュージアム・エデュティメント(博物館楽修)」でもそれぞれの会場で掲げられました。参加された方のお目にとまつたかもしれません。筆者は同連絡会の発足の時から関わってきましたので、この機会に若干の私見を交えてシンボル旗誕生のいきさつなどを紹介します。

地球博開館1周年の96年夏に、初代館長だった濱田隆士現福井県立恐竜博物館長が、「みなさんはこの地区では先輩の施設の方々。無事1周年を迎えたのを機にごあいさつしたい」と館の周辺の博物館、美術館、郷土資料館などの責任者に呼びかけた会合を開きました。

富士伊豆箱根国立公園の一角を占め、国際的な観光保養地としても知られる箱根周辺は、昔から官道・東海道の沿線に位置していました。このような歴史的な経過や、豊かな自然環境に恵まれていたため、早くから博物館や美術館の類いが点在していました。その密集度は国内有数と言えるでしょう。濱田館長の呼びかけには個人の施設も含めて26施設が出席しました。

この時の参加者から「今まで似たような仕事をしながらお互いの顔も知らなかった。施設の発展のために今後も集まりたい」という要望が出されました。要望は半年後、「毎月、各施設の紹介を兼ねて巡回しよう」、「施設のPRを兼ねて一般の参加者

も募ろう」という形でスタートしました。ちなみに毎月1回、施設から施設へと訪ね歩く形態を、昔、陸上競技の選手だったという濱田館長が「バトンを引き継ぐリレーのようだから」と「ミュージアムリレー」と命名、この名称が定着しています。

その後については、事務局を務めている奥野花代子地球博専門学芸員がJMMAの第1回学会賞を受賞した「地球博物館ネットワーク運用の一形態～ミュージアム・リレーの2年間より」に譲りますが、回を重ねるにしたがって、「活動の記録を会報の形で残したい」、「加盟施設の所在地がわかるような地図が欲しい」という意見が出されました。WESKAMS自体が簡単な会則だけで会費も徴収しないという状態で始まったため、予算上の制約もあり、すぐに実現という訳にはいかなかったのですが、関係者の協力で簡素ながら会報が発刊されるようになりました。続いて加盟施設の彫刻の森美術館の肝入りで「ミュージアムラリーマップ」という名称の地図が10万部印刷され、手にした方々の評判も上々と聞いております。

そうした中、01年5月に箱根武士の里美術館(箱根町仙石原)で行われたミュージアムリレーの後に開かれた「館・園長会議」の席上、「リレーの時にいつも感じるのだが、一般参加者が会場に来る時に『ここでいいのかな』と不安気に訪れるようなので、なにか場所を明示するものがほしい、WESKAMSもある程度の実績を積んだのでこの辺でシンボルとなる旗をつくったらどうか」という提案がありました。

この提案は大方の賛同が得られ、江戸民具街道(同県中井町)の秋澤達雄館長が「デザインは私がやってみましょう」と引き受けました。間もなく完成した旗=写真=はグリーン系の地に描かれた六角形の中にいくつもの炎が揺らめいているような美しく、かつ力強い迫力のあるものでした。秋澤さんは第50回記念のミュージアムリレーの冒頭、旗を背に「六角形は蜂の巣のハニカム構造が丈夫なことで知られています。私は建築が専門でありそれをヒントにしました。中の炎のようなものは加盟の各施設がミュージアムリレーにかける情念のようなものをイメージしました」と語っていました。

旗はWESKAMS関係者を中心に同年10月下旬に開催した1泊のバス研修ツアーや(ミュージアムラソン)でも試験的に使われ、バスのフロント

ガラスに掲げたところ、たくさんのバスが駐車している高速道路のサービスエリアでも「目立つのですぐわかる」と好評でした。「博物館楽修」の会場となった彫刻の森は世界に名だたる彫刻群が陳列されていることで知られています。周辺を樹木に囲まれた美術館は独特の雰囲気を醸し出していますが、会場の入り口に掲げられた旗は何の違和感もなくその中にぴたりと収まっていました。

そもそもミュージアムリレーそのものが全国的に見ても“一風変わったイベント”で「よくもまあここまで続いた」という感慨とともに、「自前の旗が持てるというのは精神的に豊かなこと」という実感がわいてきます。講演会などのイベントの時に会場に掲げる正規の国旗大の大型のものと、会場を移動する時に案内役の人(たいていは奥野さん)が目印に掲げる中・小型のものと3種類が作られました。特に小型のものは加盟施設から「施設の中に常時、掲げておきたいから」と秋澤さんのところに注文が舞い込みはじめしており、あらためて染元に追加の発注をしているそうです。



写真説明=W E S K A M S のシンボル旗を背に、デザインの意図を説明する秋澤達雄江戸民具街道館長=神奈川県立生命の星・地球博物館

(JMMA 個人会員、WESKAMS 協力会員、  
神奈川新聞社友)

## 第3回世界科学館会議の 開催について

国立科学博物館  
守井 典子

2002年2月10日(日)から5日間、オーストラリアのキャンベラで第3回世界科学館会議が開催されます。ホストを務めるのはクエスタコン(オーストラリア国立科学技術館)です。

世界科学館会議は、世界の科学館等のネットワーク化、活性化、および相互の情報交換等を目的とするものです。ヨーロッパを中心とする科学館のネットワークである ECSITE(European Collaborative for Science, Industry and Technology Exhibition)と、アメリカを中心とする ASTC(Association of Science-Technology Centers)の提唱により、第1回の世界科学館会議が1996年6月にフィンランドの科学センター「ユーレカ」で開催されました。JMMAのメンバーでもある小原巖氏(前国立科学博物館科学教育室長)も参加されましたが、世界48カ国から約600名の参加があったようです。

第2回世界科学館会議は1999年1月に、インド、カルカッタのサイエンスシティーで開催されました。参加者は第1回目よりも少なかったようですが、JMMAのメンバーとしては長濱元氏(東洋大学)や小川義和氏(国立科学博物館)が参加されています。世界35カ国から約300名が参加して、各国の科学館の現状や課題について報告がなされ、多くの意見や情報が交換されたようです。

この世界科学館会議から生まれたネットワークとして、アジア太平洋地域科学館会議の ASPAC(Asia Pacific Network of Science & Technology Centres)があります。ヨーロッパ中心の ECSITE、アメリカ中心の ASTCに対する、アジア太平洋地域のためのネットワークです。フィンランドでの第1回科学館会議の際に設立の可能性が協議され、1997年5月に、タイのバンコクで設立総会が開かれました。1998年9月には北京の中国科学技術館で第1回会議が行われ、2000年3月には日本の名古屋市科学館が、全国科学博物館協議会の大会にあわせてこの ASPAC を招致し、第2回会議がもたれました。また、2001年2月には再びタイのバンコクで第3回会議がもたれ、ネットワークとして着実に成長を続けているようです。

さて、第3回目となるキャンベラでの世界科学館会議ですが、筆者の手元にある案内パンフレットによると、「次世代を刺激する科学館 Science Centres:Inspiring a new generation」というテーマのもと、4回の全体会（基調講演やシンポジウムなど）と9回の分科会（パネル・ディスカッションやワークショップ、ラウンドテーブルなど）が設けられ、全体としては60を超える会合が持たれるようです。日本からはロボカップ委員長の北野宏明博士、日本科学未来館の毛利衛館長が参加し報告を行う予定になっています。おおまかなプログラムは下の表のとおりです。

また、会合の合間には日替わりのサイエンス・ショーがクエスタコンのスタッフによって上演されることになっていますし、朝・夕は、星の観察（晴れば南十字星がきれいに見えることでしょう）や、気球試乗会、国立植物園での散策（多種多様なユカリに驚きます）やコンサート、「オージー」スタイルのバーベキュー大会などが予定されています。

クエスタコンのホスピタリティのもと、オーストラリアの人々の生活を体感することができるでしょう。

現在、世界には1,200を超える科学館があり、毎年2億人の人々が科学館の展示や催しを楽しんでいると言われています。クエスタコンは、日本でその名を聞くことはあまりありませんが、世界の科学館界をリードする施設の一つと自負しています。今度の世界科学館会議には恐らく、インドでの第2回会議を上回る大勢の人々が参加することになると思われます。キャンベラの気候は日本とは反対となりますから、2月中旬というと盛夏をすぎて秋の気配が少し涼しい始める頃でしょう（会議の案内パンフレットによれば、気温は28℃～40℃ぐらいとされていますが、湿度が低いため意外と爽やかです）。参加を検討される方は、クエスタコンのウェブサイト <http://www.questacon.edu.au/iiiscwc.html> で詳細を確認されてから、そこで指示にしたがって参加登録をされることをお勧めします。

### 会議の日程

時間	2月10日（日）	2月11日（月）	2月12日（火）	2月13日（水）	2月14日（木）
5:30					
7:30			ネイチャー・ウォーク (国立植物園にて)		ASTEN会議 (加盟館のみ)ほか
8:30		受付（コンベンション・センター）	受付（コンベンション・センター）	受付（コンベンション・センター）	受付（コンベンション・センター）
9:00		ASPAC会議 (加盟館のみ)ほか	全体会2	全体会3	全体会4
10:30		休憩	休憩	休憩	休憩
11:00		全体会1 (開会式、基調講演)	分科会C	分科会F	分科会G
12:30	受付（クエスタコン）	昼食	昼食	昼食	昼食
13:30		サイエンス・ショー	サイエンス・ショー	サイエンス・ショー	サイエンス・ショー
14:00	ツアー (クエスタコン館内、 またはキャンベラ市 内)	分科会A	分科会D	バックヤードツアー (キャンベラ市内の 16の博物館施設か ら選択)	分科会H
15:30		休憩	休憩		休憩
16:00		分科会B	分科会E		分科会I
17:30	歓迎会 (クエスタコン)	交流会	交流会		
19:30		各種会議	オージー・バーベキュー (トラリー・ステーションにて)	ガーデン・コンサート (国立植物園にて)	晩餐会（国會議事堂 内のホールにて）
21:00		星空観察 (クエスタコンにて)			

研究部会活動報告  
**制度問題**  
 研究部会  
**第1回研究会**

**演題：「オーストラリアの博物館事情」**  
 日時：平成13年10月13日（土）午後2時～4時  
 会場：国立科学博物館 特別会議室  
 講師：守井典子氏（国立科学博物館教育部企画課 研究官）  
 参加者：21名

## オーストラリアの博物館事情

### はじめに

制度問題部会では、これまで世界各国の博物館の制度を含む諸事情に関して、さまざまな方からご報告をいただいた。今回は昨年、文部省の学芸員等在外派遣研修生として、3か月間（2000年11月～2001年1月）、オーストラリアの国立科学技術センター（クエスタコン）を中心に博物館・科学館の調査をされてきた国立科学博物館研究官の守井典子氏にご報告をしていただいた。

### 発表要旨

#### 1 オーストラリアの博物館の概要

オーストラリアは6州と1準州、首都特別地区に分かれている。州は一つの国と同じぐらいの独立性がある。各州に大きな博物館と美術館があり、そして科学館も徐々にできてきていている状況であり、今回の研修では北部準州以外の各州の博物館、美術館、科学館を視察してきた。現在のところオーストラリアの博物館の総数を把握している機関ではなく、おおよその数字でしかないが、約2000館程度ではないかと思われる。人口ひとり当たりの博物館の数という点では、もしかするとオーストラリアは多い方の部類に入るかもしれない。

オーストラリアの博物館は自然誌博物館といった特定の領域別の博物館というのではなく、総合博物館のまま発達してきた印象をうける。

オーストラリアは政権が変わると省庁機構も大きく変動するため、以下の情報は1996年のジョン・ハワード政権下での枠組みである。

博物館を所管するのは、連邦政府では通信・情報技術・芸術を担当する省庁である D O C I T A (Department of Communication, Information Technology, and the Arts : ドッシータとかドッキータとよぶ)である。このうち「芸術 the arts」の領域(areas)のなかの、「文化の振興と文化財 Cultural Development and Heritage」の部(branch)下にある「コレクション管理 Collections Development」の課(section)が担当している。他の関係省庁としては環境や文化財（不動産）に関わる Department

of Environment and Heritage、科学技術系の Department of Industry, Science and Resourcesなどがある。後者の下にあるエージェンシーとして CRIRO（連邦科学産業研究機構）があるが、これが2000年8月にディスカバリーという科学館をオープンさせた。規模はまったく違うが、コンセプトとしては日本の科学未来館に近い施設である。

また、このところの話題としては2000年10月に、メルボルンでMelbourne Museumが開館し、カンベラでは20年もの計画段階を経て、2001年3月に National Museum of Australia(Canberra)がオープンしている。

博物館関係の団体はオーストラリアの全国組織として MA(Museums Australia)がある。この機関は MAA (Museums Association of Australia)と AMAA(Art Museums Association of Australia)、MEAA (Museums Education Association of Australia)の3機関が合併して、1993年に設立された。もともとあった各州の博物館協会はこのMAの支部として機能している。これ以外にも、メジャーな博物館の博物館長会議である CAMDC(Council of Australia Museum Directors)や大学博物館、美術館長のカウンシルなど、他にもいろいろな組織がある。科学系では、ニュージーランドを含めたネットワークとして ASTEN (Australian Science and Technology Exhibits Network)がある。

#### 2 クエスタコン(Questacon : National Science and Technology Center)の概要と活動

クエスタコン(オーストラリア国立科学技術センター)はオーストラリア国立大学(Australian National University)の教授であった Dr. Michel Gore が、1975年にアメリカのエクスピラトリウムを見学したのをきっかけに、1980年に創設された。この不思議な館の名前は、ラテン語起源の言葉「Quest」と「Con」を合わせたもので、それぞれ「探す」「知る・学ぶ」という意味がある。その後、オーストラリア国内でも国立科学館の構想があり、日本政府による寄付を受けて公式には建国200年にあたる1988年に開館した。

クエスタコンはその使命として「Making science fun and relevant for everyone : 科学を誰にでも、楽しく、興味をもってもらおう」を掲げ、ナショナル・

センターとしてのアウトリーチ・プログラムであるサイエンス・サーカスなどの活動を展開している。



正面から見たクエスタコン



クエスタコンの館内（入り口付近）

### 3 オーストラリアの博物館の印象

オーストラリアの博物館には休館日がほとんどない。クリスマス休暇をのぞいてほぼ1年中開館しているところが多い。

博物館の教育プログラムをみると、学校団体からの訪問へは積極的に対応しており、またさまざまなプログラムも実施している。

クエスタコンでは宿泊プログラムを見学する機会があった。夕方、大型バスが数台到着し、子供と保護者がそれぞれ大きな枕を抱えてバスから降りてきたので驚いた。展示室を見学したり夕食をとったりサイエンス・ショーを見たりして、館内のあちこちで寝泊りをしたようだ。翌朝は外のテラスで朝食をとり、ビニール袋を利用した簡単な熱気球づくりを楽しんで、再びバスで帰っていった。

また、夏休み期間中の「ホリディ・プログラム」では託児所のように、子供を1日預かることをしている。朝、親が子供達を預けに来る。夕方迎えにくるまで、子供達はクエスタコンの「Q」のマークがつけたお揃いのチョッキを着せられて、館内はもちろん、周辺の広場で一日中いろいろ遊びをして過ごす。

クエスタコンの活動で最も有名なのは、サイエンス・サーカスである。50点ほどの移動式装置を大型のトラックに積み込んで、1年に6回のツアーが行



ホリディープログラムの様子

われる。運営するのはスカラーとよばれる15人の学生である。1回のツアーは約3週間で、スカラーが10人とクエスタコンのスタッフ2~3名が、展示とともに町から町へ2、3日ずつ移動する。拠点となる施設を決めて即席の展示をつくり、ショーを見せる。近隣の学校にも出かけていってショーを見せる。教員向けの簡単なワークショップも併せて実施する。幸いなことに、ペンティゴという町でのサーカスの現場を見学できた。また、スカラーの研修にも立ち合わせてもらった。

クエスタコンの先駆性として、サイエンス・ショーにおいては来館者にまず楽しんでもらうということに力点があり、説明をあまりせず、柔軟な点を感じる。また、ワークシートはつくっておらず、「先生にも考えてもらう楽しみを」という考え方から、教員向けの資料ではヒントを列挙するにとどめている。

研究会の後半は質疑応答という形で議論を進めた。

#### 【質問】

オーストラリアの博物館には子供の来館者も多く、同伴してきている親も多いように思うが、父母のその意識の違いはどういうところからでてくるのであろうか。

#### 【回答】

博物館が教育機関として健全な楽しみを得られるところとして浸透しているのではないか。ちなみにクエスタコンはTVコマーシャルをやっていた。

#### 【質問】

オーストラリアにはテーマパークやアミューズメントパークみたいなものはないのか。

#### 【回答】

ヴィクトリア州にはゴールドラッシュをテーマにしたソブリン・ヒル (Sovereign Hill) というテーマパークがある。これはオーストラリアのメジャーな博物館に数えられている。

#### 【質問】

クエスタコンの入場料や入場者数はどうなってい

るのか。

【回答】

入館者数は(年間)30万人ぐらい。キャンベラ(オーストラリアの首都)の人口ぐらいである。入場料は子供1人5ドルで、日本円になおすと300円ぐらいである。簡単な昼食であれば十分な額である。

【質問】

クエスタコンのサイエンス・サーカス・ショーのスカラーはどういう人達がなっているのか。

【回答】

CPAS(Center for Public Awareness of Science)がもっている大学院の学生で、スカラーの仕事は、科学技術に対する人々の理解をどうやって高めていくかということを研究するコースの一部になっている。そこを修了した人達は科学関係のライターや記者になったり、科学館の職員等になったりしている。

【質問】

オーストラリアの博物館の現状はイギリスからの影響等はないのか。

【回答】

イギリスだけというよりは、欧米のいいところをどんどん取り入れていこうという感じである。

【質問】

自然誌というか、自然保護というか、アボリジニとかの展示はないのか。

【回答】

今日はほとんど紹介できなかったが、たくさんある。

【質問】

アボリジニの見学者は多かったのか。

【回答】

ほとんど見かけなかった。

【質問】

博物館というのは国民意識をもたせる存在だと思うが、オーストラリアについてはどうか。

【回答】

アボリジニに対しては多くの予算がついている。博物館の見学者へのアボリジニの情報提供ということかもしれないが、科学館でさえ、アボリジニ関係の展示は多い。教育キットも充実している。

【質問】

アボリジニの展示をするということが主体であって、アボリジニの展示への参加はないのか。

【回答】

ないと思う。

【質問】

スライドではクエスタコンで子供達の宿泊プログラムがあったが、日本ではどうか。

【回答】

まず職員の体制ができないのではないか。施設面の問題もある。オーストラリアの方が人々の生活や対応が柔軟な気がする。

【質問】

オーストラリアの学芸員の養成制度についてはどうか。

【回答】

キューレターは他の国と同様にいると思うが、アメリカやイギリスと似ているのではないか。大学によってはミュージアムスタディーズのコースがあるが、そこを卒業したからといって学芸員資格を得るわけではないし、何か資格を得ることもない。色々な職の公募はあって、優秀な人がそれに採用されるのではないだろうか。

【質問】

展示の内容のレベルはどうか。また、展示に最先端の科学は反映されていたか。

【回答】

施設によって違うとは思うが、それほど高度のものではない。最先端の科学ではなく、いわゆる参加体験型で、専門家でなくとも親しみをもって科学に接することができるよう作っているようだ。

【質問】

クエスタコンは収蔵資料をもっていない?

【回答】

収蔵資料はない。

【質問】

身体障害者に対する配慮はどうか。

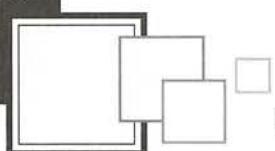
【回答】

特に強調しなくても、ある程度の配慮をすることは一般化しているようである。

今回はオーストラリアの事例を報告していただいたが、これから各国の博物館を支える専門職の養成制度についても取り上げ、制度としての博物館を今後どのように考えていくかという点についても、考察していくこととなった。

(制度問題部会幹事 井上 敏)

# 支部会だより



関東支部会 日本科学未来館実地見学研究会

テーマ：日本科学未来館の概要とマネージメント構想について  
日 時：平成13年11月9日

学会活動の活性化を図るために地方支部の設置が進められていますが、関東支部でも動き始めました。関東支部の場合、JMMA会員の70%に近い大所帯であり、且つ地域的には本部と直接にカバーし合う関係にあるために、学会全体の活動との関連性を考慮しつつ独自の活動を積み重ねて行き、支部を立ち上げて参りたいと考えています。

このような考えのもとに、ここに第1回の実地見学研究会として本年7月9日開館以来、広く話題を集めている日本科学未来館を訪ねることとしました。その狙いは、昨今ミュージアムの展示が参加型、体験型に移行してきましたが、さらに進めて同館が21世紀の展示とも言える“展示資料と人とが一体となる展示”に挑戦している状況を支部の皆さんにも触れていただく機会を提供することになりました。そこでは入館者が展示資料を間において解説員、科学者、芸術家、歴史家などとコミュニケーションを交わすことによって暮らしの中に科学や芸術や歴史などを導き入れ、理解を深めることができる理想の未来館としてチャレンジしている姿が読み取れるものと考えました。

開館間もなく、まだまだ多忙を極めている同館を煩わした見学研究会では事務総長・林俊一氏の挨拶、事業推進室長・齋藤仁志氏の講演「日本科学未来館の概要とマネージメント構想」を伺うことができました。講演並びに参加会員からの質疑などをもとにして以下のとおり見学研究会の内容を報告します。

## 日本科学未来館の生き立ちと建設構想

いつの頃からか日本の次世代を担う青少年の理工系などが懸念され始め、科学技術の理解増進策が政治課題となりはじめた。平成7年には「科学技術基本法」が成立して、科学技術に関する学習の振興と理解の増進が提唱され、政策的に予算措置がとられるなど、この分野には追い風が吹き始めたとされている。

平成8年には既存の新技術事業団と日本科学技術情報センターとが統合して、今日の科学未来館の母体となる科学技術振興事業団が誕生する。同振興事業団が果たすべき事業分野の中で科学技術理解増進事業部門においては、科学館整備モデル事業、草の根口ポット支援事業、科学館人材研修、サイエンスチャンネル(科学番組)などを手がけることとなり、

これらの成果が後に科学未来館構想のなかに引継がれて行くことになる。相前後して、平成10年、お台場の臨海副都心6.6haの用地をカバーする国際交流大学村構想が持ち上がり、急ピッチで具体化した。構想は僅か3カ年の準備期間を経て、今日の日本科学未来館をはじめ東京国際交流館(800世帯収容の研究留学者のマンション)、産総研臨海副都心センター(国際的な産・学・官の研究交流拠点)の巨大な3棟の建物として完成するに至っている。

それでは、同館が開館に至るまでの足取りを見ると、まず建設予算は総額433億円が充てられている。平成10年度に土地、建物取得費300億円、展示関係費は平成11年度に80億円、12年度に53億円が予算化されている。このプロジェクトの場合には、計画をたてつつ予算を要求しながら展示を作成していく特別な方法をとったため、展示関係費133億円については13年7月9日開館までに展示された第1期工事と14年3月末までに完成予定の第2期工事とがあり、14年度から新たな展示資料が導入され、一層館内を充実させることになろう。

一方、同館建設の中身ともいべき展示構想については、科学技術の理解増進と振興という設立目的のもとに従来の科学館とは趣きを異にする構想からなる施設を創ろうと目標を定めて取り組みが開始された。平成11年10月から13年7月の開館までの短期間で展示空間の利用計画や展示設計を実施するためには総合監修の形はとらず、科学技術アドバイザーほか多数の研究者の協力を得て展示準備が進められた。テーマは当時の科学技術庁の重点研究課題6項目(宇宙開発、海洋科学技術、脳科学、ゲノム・タンパク、ナノテクノロジー、地球環境)と情報科学技術を加えた7項目を下記の4部門に編成して、ハンズオンと映像を豊富に取り入れた展示によってフロア別にゾーンが構成された。

## 主なる展示テーマと建築概要

1. シンボル展示 -Geo-Cosmos
2. 常設展示……総合展示テーマ：21世紀の新たな夢を描く

### テーマの分野別展示

- (1) 地球環境とフロンティア：整備面積2,010m<sup>2</sup>  
・環境と共生を目指して (1階)

- ・空間と時間への挑戦 (以下、5階)
- ・探査への挑戦
- ・極限環境への挑戦
- ・フロンティアラボ
- ・モーションライドシアター  
「ザ・ドリーマー…21世紀に新たな夢を描け」
- ・ドーム映像  
「巨大隕石衝突…衝突が歴史を作る」
- 「オーロラ一天光の揺らぎ」

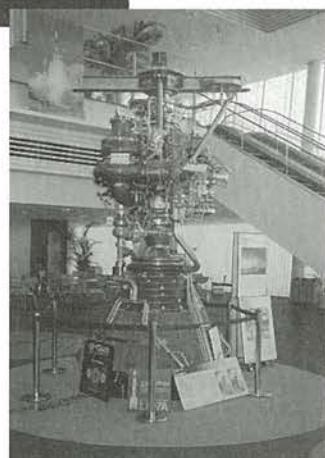
(2) 生命の科学と人間：整備面積 1,150 m<sup>2</sup>

- ・ゲノム
- ・脳
- ・医療
- ・VRシアター  
「脳迷宮—脳の機能を探る」
- ・生命体験コーナー



(3) 技術革新と未来：整備面積 850 m<sup>2</sup>

- ・ロボット
- ・マイクロマシン
- ・ナノテクノロジー
- ・超伝導

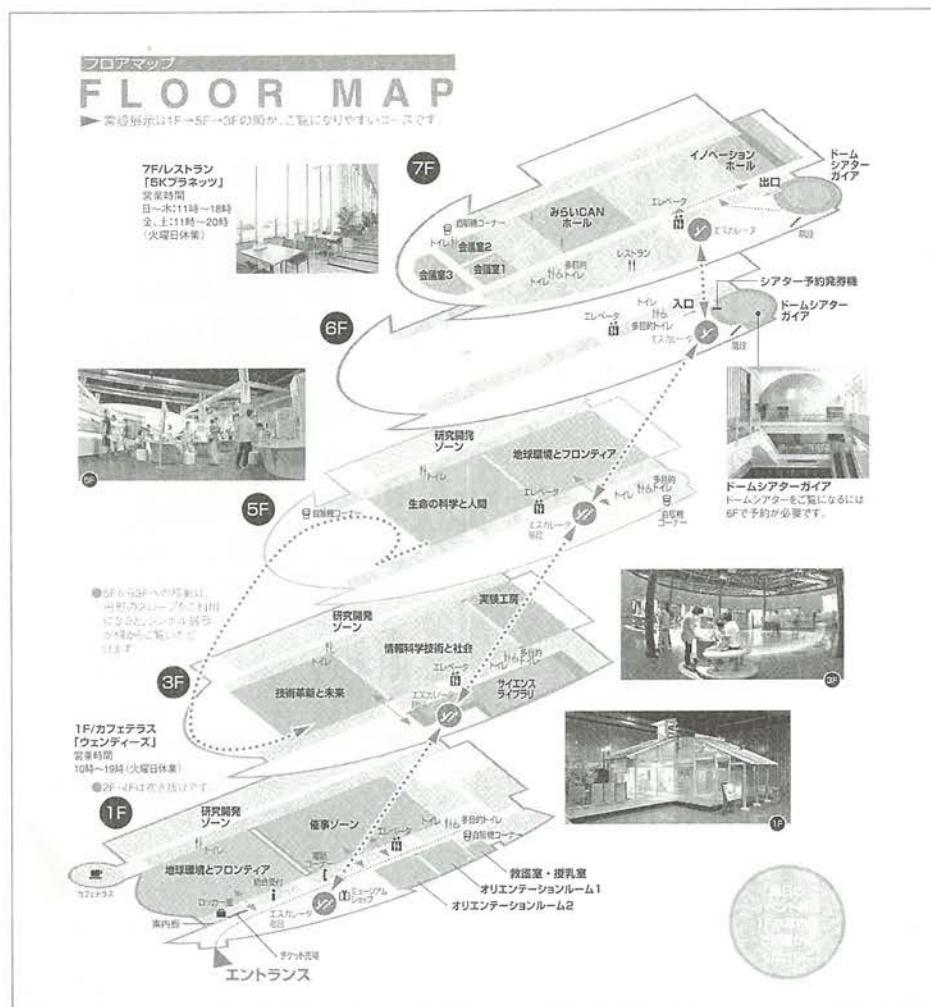


(4) 情報科学技術と社会：整備面積 1,093 m<sup>2</sup>

- ・つながり—コンピューターとネットワークの仕組み
- ・何でも—究極のモバイルとデジタルミュージアム
- ・いつでも—バーチャルリアリティと記憶
- ・どこでも—移動とネットワーク
- ・だれでも—情報表現とインターフェイス
- ・コミュニケーション広場
- ・シミュレーションライド—ライドカム



科学未来館はこれらの展示ゾーンに併せて7階スペース全部を研究交流の場として、300人収容のホールと3部屋の会議室およびレストランからなる人々が集う空間を持っている。さらに加えて、建物の各階を縦に区分する形で、研究開発部門のための研究室が配置されている。すなわち科学未来館は展示・研究交流・研究室の3つの機能を併せ持つ施設となつている。



## 建築概要

敷地面積	19,636.65 m <sup>2</sup>	建築面積	888,101 m <sup>2</sup>
延べ面積	40,589.74 m <sup>2</sup>	構 造	鉄骨造、一部鉄筋コンクリート造
階 数	地下2階、地上8階、塔屋1階	高 さ	軒高 : 42.0 m 基準階高さ : 4.5 m
駐車台数	190台 (付置義務台数 112台)	工 期	1999年12月～2001年3月

## 日本科学未来館のコンセプトと活動方針

同館が、長い歴史をもった博物館とは異なり、いわば白紙の状態で方針を描き、立ち上げることができたことは科学技術振興策の追い風という有利な条件に恵まれたことと無関係ではない。開館間もない同館がどのような方針のもとに、どのように運営しつつあるのか、私たちにとって興味深いことである。

20世紀の科学技術は飛躍的な進歩を遂げ社会経済を発展させた反面、戦争や地球環境にみるような負の遺産をも残した。それは科学技術がともすると人から離れた存在に陥り、科学技術を創るのも使うのも人であるという視点を忘れがちであったからである。21世紀は、これらの反省をもとにして高度な科学技術と複雑化する現代人とその社会の状況を

展望しながら博物館や科学館は自らの理念を求め、活動のあり方を練り、事業運営に臨むことが期待されている。

同館にとって、その活動の第一歩は科学技術と私たち一人一人の距離を近づけることから始めることであり、私たち個々人が社会全体につながっていることから、当館の活動は個と全体のつながりを意識したものである必要がある。当館には多様な人たちが集い、そこで展示、イベント、実験またはボランティアに参加するなど、一人一人から始める。同館は科学技術による豊かな社会づくりのための活動につながる触媒の働きを目指している。

毛利館長は自らのイニシャルを銘打った"MMコンセプト"と呼ぶ独特な活動方針を提示しているので紹介しよう。

## MMコンセプト……「リアリティーとの共鳴」

### 1. Movement

日本科学未来館は単なる「箱」ではありません。進化する「運動体」です。

### 2. Mobile

日本科学未来館は不動で自閉的な館ではありません。柔軟性を持った、携帯しうる「知のルーツ」です。

### 3. Media

日本科学未来館は存在することが目的ではありません。新しい科学技術文化を創造するための「触媒」です。

### 4. Meeting

日本科学未来館には境界がありません。新しい出会いの場、英知の交差、合流点です。

そして、このコンセプトを事業活動の上で実現するために、同館全スタッフに対して次のような行動指針を掲げ、その取り組みを宣言している。いわば科学未来館10カ条とでもいうべきものであるので少々長くなるが、さらにその言葉を紹介したい。

1. 皆さんに見てみてもらうのは物より人です。  
…発見した人、出会った人。そこに集う「人」が主役です。

2. 発見してもらうのは「出会い」です。  
…新しい刺激、感動、いろいろな「出会い」の場をつくります。

3. 分かち合いたいのは「心からの共鳴」です。  
…互いに感じあう心と心。一方通行でない「心からの共鳴」を大切にします。

4. そのために市民と一緒に運動体を作ります。  
…みんなで一緒に作り上げ、一緒に成長する。変化し続ける「運動体」をめざします。

5. 開かれた研究の拠点となり、研究者を支援します。  
…さまざまなテーマに取り組む「研究者」をサポートします。

6. ボランティアの力を結集させ、人と一緒に成長します。  
…みんなで力をあわせて成長します。

7. 狹義の科学技術というカテゴリーに留まりません。音楽もアートも演劇もスポーツも私たちの運動体を形成します。  
…科学技術も一つの文化です。「幅広い視野」をもって、あらゆる文化活動を取り上げます。

### 8. そのために柔軟で開かれた「場」を作ります。

…誰でも気軽に参加できる、そんなコミュニケーションづくりを進めています。

### 9. コミュニケーションとネットワークづくりも私たちの仕事です。

…コミュニケーションを大切に、そのためのネットワークづくりにも積極的に取り組みます。

### 10. 来てもらう場がありますが、出かけていく場もあります。

…館内の活動に留まらず、積極的にそとへ出かけていきます。

因みに、一人の解説員にMMコンセプトを問うてみたところ、知っている、よくぞ聞いてくれたと言わんばかりの答えが帰ってきた。

## 日本科学未来館の事業活動の特長

それでは同館が組み立てたコンセプトや活動方針は一体どのように館内の各現場に展開されているのか、その主な例を報告しよう。

### (1) インタープリター

私たちは自動出札で入場券を求めるとき、エンジ色のユニフォーム姿の女性アテンダント（案内係員）に迎えられて自然と展示室に導かれる。タッチパネルや展示に足を止めて見入っていると黄色のシャツを着たインタープリター（解説員）が近寄ってきて、説明を添えてくれる。一般の博物館ではガラス越しに展示資料と説明ラベルを見較べながら観覧することが多いけれど、この館には何人のインターパリターがいて、展示資料と観覧者を、観覧者の側に適した言葉によって結びつけてくれる。展示資料とインターパリターとが一体となった新しい展示の方法を提案していく、入館者に対して新鮮な刺激や関心やいろいろな出会いの場を創ろうとする試みが実行に移されている。

### (2) ボランティア

2001年が国際ボランティア年であることにも関係して、同館ではボランティアの方々が協力できる場を積極的に提供している。各人の経験や技能を自発的に活かせるような体制を用意しているという。インターパリターに混じって展示フロアで入館者との対話や案内等に従事している。13年11月現在、第3期までの登録者は高校生から70歳台の大人まで各年代層の300名に上っている。今後さらに登録者を拡大して1000名規模をめざしている。実際に登録のみの人と参加する人があって、参加する人には昼食代850円と交通実費（50キロ以内）のみを館が負担している。

ただ、ボランティアひとりひとりの個性や専門性を自発的に發揮できるためには館側ばかりでなく入館者もこれを認める環境がどのように整備できているのか短時間の見学で確かめることができなかった。

### (3) 「展示の前で研究者に会おう」

これは入館者とのふれあいの仕組みとして考えられたもので、30名程度の受講者に対して展示制作に携わった研究者が直接自分の展示を自分の言葉で説明し、受講者の人たちと語り合い、深い理解を意図するものである。制作に当たった研究者の先生方の展示が直接に評価される厳しい場面でもあるが、寧ろ直々に解説するために研究者が館に入りやすくなる効果が大きいという。

### (4) 実験工房

3階実験工房の部屋では実験を体験することにより先端科学技術への理解を深めるプログラムが用意されている。大学の先生たちの監修による研究者やボランティアも参加して創った実験プログラムには

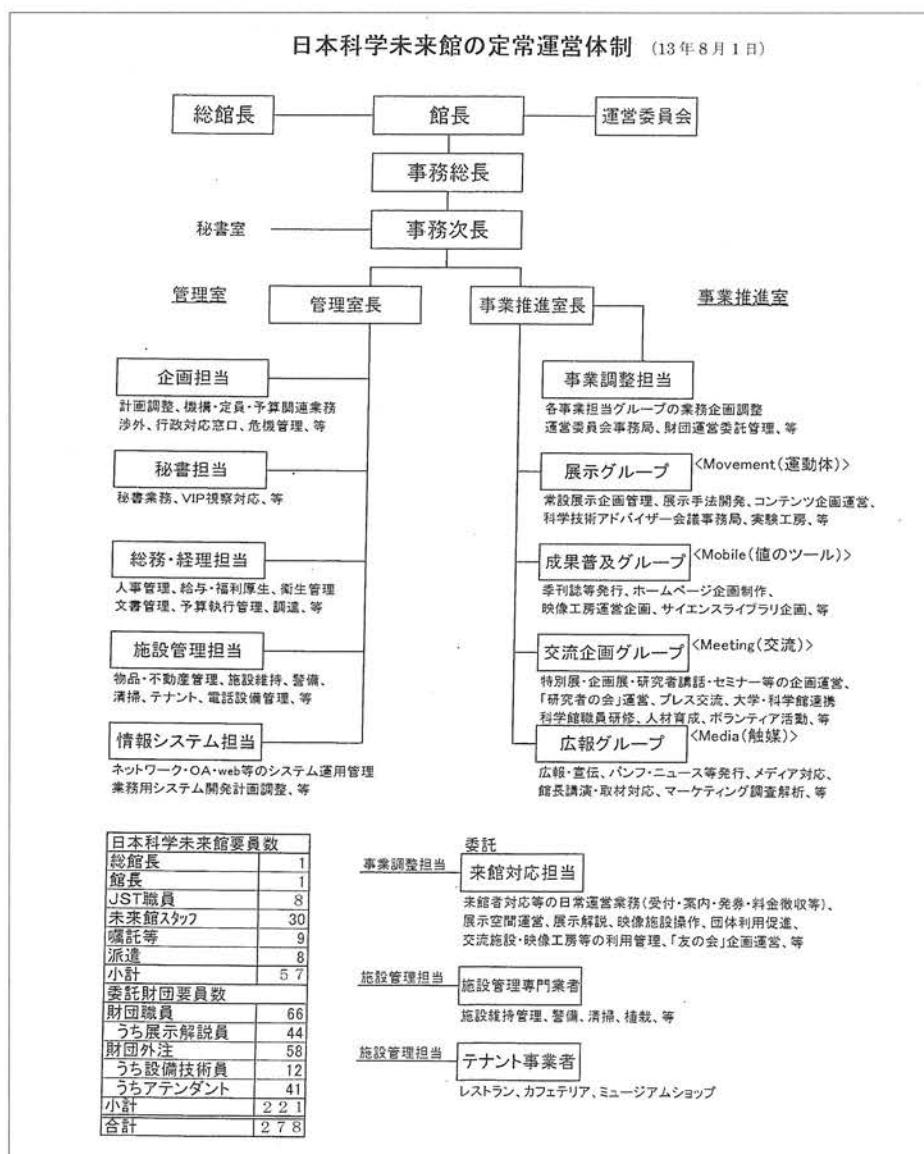
超伝導、レーザー、ロボットなどのコースが土・日曜の午後に開かれていて賑わいをみせる。

### (5) 友の会

友の会は同館の事業活動に協力しながら科学技術に触れるとともに多くの人の出会いと感動を楽しめるリピーターの集まりである。会報配布と1年間入館料無料の特典があり、会費は個人会員年間1000円、同居家族全員用の家族会員2000円となっている。現在、登録会員数は5,845名である。なお、会員証によって隣接の船の科学館にも割引料金で入館できる。

## 日本科学未来館の運営体制

このように大きな館を動かす運営体制と要員の概要是次の図表のとおりである。総館長・吉川弘之氏(東大名誉教授)、館長・毛利衛氏及び事務総長林俊一氏のもとに管理室、事業推進室の2室があつて、明快なライン組織である。



前頁左下の要員表について若干の注釈を加えると、JTS職員とは同館が採用している科学スペシャリストと称する学芸員に相当するスタッフであるが、展示を見せる仕事ばかりではなく、高度の専門分野の研究員でもある。当館では学芸員資格の有無は問っていない。ただ、他の例に習って5年を限度とする契約研究員であって、在職中の成果をひつ提げて他所へ移っていくことになる。

委託先職員としては、インタークリターは旧科学技術庁の外郭団体である科学技術広報財団所属であり、アテンダントは他の外注先の職員である。さらに外注の清掃、設備保守、警備の駐在職員を加えると総計250名規模となり、この人たちが一体となつた協力関係で館を動かしている。

骨格としての組織が実際に機能的に動くには神経や筋肉に相当する指示や調整会議によるところであるが、当館の主要な会議は管理室が週1回召集する館長、事務総長以下室長、グループ長及び関係する広報事業団の本部長で構成する全体会議がある。また、2週に1回の割で館長と個々のグループが事業推進上の課題を討議する会議がある。齋藤室長のお話では、両会議とも毛利館長がリーダーシップを發揮し、実践的な組織運営がなされている様子が窺われた。

## 見学研究会に参加して

新しい館園を探訪する時、いつの間にかクリティカルな批評家の視点になりがちであるが、この見学会では、同館の空間利用の面白さや巨大なGeo-Cosmosによる地表の環境を表すシンボル展示の美しさに目を楽しまされたという声を聞いた。また、入館対象を中学生以上においているのに小学生の子供たちがハンズオン展示やインタークリターの力を借りたりして彼らなりに楽しみ、理解している様子を高く評価する声もあった。

このことは、短時間の準備にもかかわらず、従来とは趣を異にする館を創ろうとする意欲と科学技術理解増進と言う輿望に支持されて同館が幸運な誕生をしたことを意味するものであろう。

「趣を異なる館」の誕生を可能にしたと思われる要件の一つには、後発であるために学術的なもの（資料）に相当するいわゆるコレクションを持たなかつたことが挙げられよう。代わりに振興事業団が手がけてきた基礎研究や草の根口ポット等のような将来に向かた幾つもの先端技術に関する研究成果の塊を持っていたことであった。二つには短時間に準備せざるを得ない状況にあったことであろう。特定の監修者によって計画し設計することは困難であつたために多数のアドバイザーと研究者にテーマが割り当てられ、個々の研究者の責任において自由な創

意に制作は任された。いわば博覧会のパビリオンの小型版に似た手法で自由闊達に準備が進められたのではなかろうか。三つには先端科学技術の各テーマのどれをとっても映像であれハンズオンを駆使しても、優れたインタークリターの適切且つ心に訴える説明に勝るものはない筈であり、このことに着目し展示と説明員を一体としようとする展示手法を探り込むことのできたことがあげられよう。

そして最後に、上記の差異や特色を可能にしたものは科学技術理解増進という時代の風に乗ることのできた関係者の方々の志やエネルギーがあったからこそと思われた。確かに従来と趣を異にしようという主張を随所に感じたけれども、これを可能にした恵まれた経営環境にはいささかの羨望を抱かざるを得なかった。

一方、面白いことに科学未来館の英文名称はなんと「NATIONAL MUSEUM OF EMERGING SCIENCE AND INNOVATION」であつて、国立ミュージアムを名乗っている。改めて、同館もやはり我々ミュージアムの仲間であることを確認した次第である。関連して面白いエピソードを伺う機会があった。当初、同館は「サイエンス ワールド」のネーミングが考えられていたところ、横文字はダメという他所からの意見によって、公募により「日本科学未来館」に決まった経緯があるという。「みなとみらい」などと同様の親しみやすいもので、未来館なのか科学館なのかなどと律儀な詮索を要さない模様。ただ、わたし達の興味としては展示できるものは現在であつて未来ではない、未来をどのように扱っていくのか。科学技術の歴史やこれを留めるアーカイブなどの取り扱いはどうするのか。ナショナルミュージアムのセンターとしての役割はどうか等など、今後の同館が進むべきあり方に深い関心を寄せる質疑が少なくなかった。

どこかで、「日本では、ミュージアムは小さく産んで大きく育てることなく、大きく産んで小さく育てる」といみじくも評しているのを聞いたけれども、同館こそは大きく育つて欲しい。これからは特殊法人改革とか独立行政法人化の風当たりは必至であり、当然これらを視野にいれたマネージメント戦略を用意しつつあろう。アンケートによる入館者調査などの評価には特に力をいれているといわれるが、同館らしい適切で合理的な評価方法が内外ともに用意されることを期待するものである。

日本科学未来館はやがて今日までの開館努力と誕生直後の支援や話題性という第一段ロケットを外すとき、宇宙とは違つて向かい風や乱気流に遭うかも知れないが、利用者や社会の期待に応えて勢いよく未来に向けて上昇されることを願うものである。

(関東支部会幹事 原 秀太郎)

新刊紹介

聞き書きオーラルヒストリー

## 堺打ち刃物を語る

諸岡博熊・竹内利江編

発行所 堀 HAMONO ミュージアム

平成13年7月20日発行



高層ビルが立ち並ぶ近代都市・大阪府堺市。そこに継承されて来た「匠の技」を堺の代表的な文化資産として位置づけ、保存・活用していこうとする事業の一つに「堺まちかどミュージアム」がある。「匠の技」には「刃物」をはじめ「昆布」、「線香」、「和ざらし・ゆかた」、「五月鯉幟」の5分野にわたる伝統工芸品が指定されており、「堺まちかどミュージアム推進委員会」（堺市長公室文化振興部文化課内）のもとに官民一体となつた整備が進められている。これら「匠の技」の中でも堺の打ち刃物は特に有名で、2000年には「堺HAMONOミュージアム」（堺刃物伝統産業会館）がオープンし、堺の刃物を内外にPRする常設施設として、製品の展示や製作工程（研ぎ、鍛造など）の実演や即売が行なわれている。本書「聞き書きオーラルヒストリー／堺打ち刃物を語る」は、この「堺HAMONOミュージアム」の計画及び開設にアドバイザー兼研究員として参画してきた諸岡博熊氏と竹内利江氏によって、開館一周年事業にあわせて企画、出版されたものである。諸岡氏は、JMMAの副会長として本学会の指導的役割を担つてきた方であり、著書もミュージアムのマネジメント分野のものが多々、本書もそうしたマネジメントの文脈の中で企画、編集されている。すなわち、ミュージアムの在り方が「モノで情報を探るより、ヒトに情報を語らせる方式に人々は新鮮な興味を覚えだした。名物チーチャーの話を聞くために、わざわざ博物館にでかける傾向が見られるようになってきた。このことはモノではなく、ヒトが語る情報を探し、楽しむ傾向を示唆している。ミュージアムにこのようないい新しい魅力を備えるには、大勢の有能な語り部から詳しい情報を求めることが必要となる」（巻末の「作成にあたって」より）というように、ミュージアム利用における二つの変化を踏まえた上で、「生きた情報」のデータベース化を目指したものである。総ページ460ページ強のなかに、現在の堺打ち刃物を代表するプロ職人、老若男女27名を昭和45年生まれの青年に至るまでの人生でホットな情報が満載されている。明治39年生まれの最年長の工匠から昭和45年生まれの青年に至るまでの人選への配慮や足繁く、また丹念に取材を重ねるという聞き取り姿勢が、本書を単なる技術・技能のデータベース化、あるいはノウハウものに陥ることを免れさせており、そこにはヒューマンで温もりのある物語が滲出している。同時に、これらの記録が、それぞれの時代を生きたプロの職人の自分史となつているところが面白い。

（文責 JMMA事務局 高橋 信裕）

# i n f o r m a t i o n

## ◆第7回大会のご案内に関するのお詫び◆

先日書面で皆様にお伝えいたしました第7回大会の日程等が間違っていました。  
ここに訂正してお詫び申し上げます。

### 平成13年度日本ミュージアム・マネージメント学会第7回大会の概要（案）

◆日 程：平成14年3月9日（土）～平成14年3月10日（日）

◆総括テーマ：21世紀のミュージアム・マネージメント  
～ミュージアムとリレーションシップ～

◆会 場：学習院大学

◆プログラム：

【第1日目】 3月9日（土）

10:00～12:00 理事会

12:30～13:50 総会・学会賞授与式

14:00～14:10 開会の辞・大会趣旨説明

14:10～16:00 研究発表会（発表は1人10分、質問は2分）

16:20～18:00 研究部会の開催

18:30～20:00 懇親会

【第2日目】 3月10日（日）

9:30～10:10 研究部会・支部会報告

10:10～11:50 シンポジウム「地域と歩むミュージアム」

シンポジスト： 大堀 哲

濱田 隆士

中川 志郎

諸岡 博熊

コーディネーター：高安 礼士

11:50～12:00 大会のまとめ・閉会式

14:00～ エクスカーション（アフタヌーンミュージアム）

★第1日、第2日を通してポスターセッションの実施を計画しております。

Information

# i n f o r m a t i o n

## ◆会報に掲載する投稿原稿を募集いたします◆

JMMA会報では、投稿原稿を募集しています。編集方針は以下のとおりですので、原稿を投稿する方は事務局までお知らせ下さい。

### 【JMMA会報投稿原稿の考え方】

1. 会員の未発表原稿を取り上げるものとしますが、事務局から会員及び会員以外の方に原稿を依頼することもあります。
2. 投稿にあたっては、会報のどのコーナーに投稿するかを明記し、事務局まで申請してください。
3. 原稿は、署名原稿として掲載します。
4. 投稿された原稿については、編集委員会によって審査が行われ採否を決定します。  
また、修正等をお願いする場合もあります。
5. 投稿原稿は採否にかかわらず、返却いたしません。

## ◆会報24号（次号）情報提供のお願い◆

会員の方々が携わった、または見学した展示施設情報、リニューアル情報、ミュージアム新設情報、展示メディア開発等をお知らせ下さい。会員の方々の出された出版物や研究成果をお知らせください。会報等で掲載します。サポートしてほしい情報や案内等もお気軽にお寄せください。

### 【JMMA会報の基本構成】

1. 論考・提言・実践報告  
会員の研究、考察、実践活動等の成果を発表します。
2. ミュージアムのエントロプルナ  
ミュージアム運営において、果敢な取り組みを行っているミュージアム人にスポットライトをあて紹介します。
3. 時の話題  
ミュージアムを核とした町づくりの話題や、ミュージアム関連の新制度、その他さまざま取り組み成果など、ミュージアム・マネージメントに示唆を与えてくれるような新鮮な話題を紹介します。
4. 研究部会報告  
各研究部会の活動報告を掲載します。
5. 支部会だより  
各支部会の活動報告を掲載します。
6. 新刊紹介  
ミュージアムに関連する本、ミュージアム・マネージメントに参考になる本等を、書評を添えて紹介します。
7. インフォメーション  
事務局からのお知らせを掲載します。

Information



## ◆会費納入のお願い◆

会費未納の方は下記口座までお早めに納入くださいますようお願い致します。  
請求書・領収証等が必要な方は事務局までご連絡ください。

郵便局の場合 口座番号 00160-9-123703

「日本ミュージアム・マネージメント学会」

銀行の場合 富士銀行 篠谷支店 普通預金NO. 1740890

「日本ミュージアム・マネージメント学会」

## ◆事務局から◆

事務局の窓口業務は、月曜日から金曜日までの午前10時から午後5時までとさせていただいております。ご了承下さい。

なお、ファックスについては常時受信可能ですので、こちらもご利用下さい。

Information

## 新規入会者のご紹介

(平成13年9月16日～12月25日現在)

### 【個人会員】

伊藤 陽子 様	高知県立牧野植物園
川村 智子 様	明野村埋蔵文化財センター
北原 早苗 様	大谷昭宏事務所
米谷 博 様	千葉県立大利根博物館
佐々木 隆矣 様	岐阜県先端科学技術体験センター(サイエンスワールド)
原田 和彦 様	長野市教育委員会
湯佐 公子 様	

### 【法人会員】

東京家政大学文学部心理教育学科 様

### 【学生会員】

李 恩美 様	延世大学校
細野 朱里 様	京都ノートルダム女子大学